
俺と先輩(アホ)とその他

ミンチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と先輩アホとその他

【Nコード】

N0118E

【作者名】

ミンチ

【あらすじ】

はちやめちやでなんでもありの先輩。これはそんな先輩に主人公が振り回されまくるほのぼのしたお話。《休止ちゅ》

第1話 変な先輩（前書き）

全て1から書き直しましたので、前よりだいぶ読みやすくはなつたと思います。

第1話 変な先輩

『来い』

午前の授業も終わり、今は昼休み。教室で昼飯を食べようとした時、先輩からメールがきた。

来い？ どこに？

メールを返信。

『自分で考えなさい』

無茶苦茶だな…

『ヒントは屋上』

それって答えなんじゃ…

『早く！』

はいはいわかりましたよ。

俺は昼飯を食べるのをあきらめ、しかたなく屋上へ向かった。

そして屋上に出る扉の前。

あれ？ たしか屋上って立ち入り禁止なんじゃ… もしかして気にしたら負けか？

なんて思いつつ扉を開けて屋上に出ると、先輩が腕をくんでえらそーに立っていた。

「遅い！」

いきなりむすつとした顔で怒鳴る先輩。

「無茶言わないでください。 これでも急いだんですから」

うそだけど。

「…ったく、心配するじゃない」

「え？ なんですか？ 聞こえませんか」

「なんでもないわよ！ それよりまだ自己紹介してないでしょ？」

自己、紹介？ いったい何を言いだすんだこの人は…

「自己紹介って、先輩にですか？」

「ばかね！ 今更私にそんなもんしてどーすんのよ！ 読者によ！ 読者！」

先輩はなぜか怒りながら俺を指差す。

ドクシャって何だ！？

「すみません、意味がわかー」

「早く！」

キツイ目で睨んでくる先輩。

元々目つきが悪いせいもあって、かなり迫力がある。

「わ、わかりましたよ。やればいいんでしょ」

俺があきらめると、先輩は笑顔になり、

「じゃあスタート！」

と言って指を鳴らした。

「えーとー」

「どこむいてんのよ！ 上よ上！」

空を指差しながら怒鳴る先輩。

ほんつとわけわかんねえ：

俺は言われたとおり空を向き、訳のわからない自己紹介を始めた。

「はあ： 赤坂 あかさか 秀 シユウ 16歳、高1つと、これでいいですか？」

「身長も」

「175cmくらい」

俺は何やってんだ…

「じゃあ次は私ね！ 名前は米原 よねはら 綾香！ アヤカ 17歳で高校2年生よ
！」

いったい何がしたいんだよ。

「身長は167cmくらいかしら」

空に向かって元気に自己紹介を始める先輩。

てゆうか今更ながら誰に話しかけてんだ？ ドクシャ…だっけ？
変な宗教に影響でもされたのか？

「趣味は一」

この後も先輩の訳のわからない自己紹介が10分ほど続き一

「ふう、ざっとこんなもんね！」

綺麗にまっすぐのびたロングの髪をくるりとさせ、俺の方を振り
返る先輩。

「終わりましたか？」

「ええ、終わったわ！」

とてもさわやかな笑顔で言う先輩。

「そうですか。じゃあ俺は帰ります」

そう言って帰ろうとすると一

「待ちなさい！」

先輩は俺の肩をつかみ、俺をストップさせる。

「なんですか？ もう用は済んだんじゃないんですか？」

「何言ってるのよ！ まだ何もしてないでしょ！」

じゃあさっきの自己紹介はなんだったんだ：

「わかりました。何をすればいいんですか？」

「今から物まねするから見てなさい」

「見てるだけ、ですか？」

「ええ、見てるだけ」

見てほしいって… 何？もしかして変態？

「んじゃ始めるわよ！」

先輩はそう言うと言上にある安全のためのフェンスに両手をかけ、

どこか遠くを見つめたした。

「もう嫌！　こんな毎日毎日イジメばかりの生活…　耐えられないわ！」

何だよそれ…

「あの…」

「なによ？」

むすっとした顔で振り向き、睨んでくる先輩。

「それ、何のマネですか？」

とりあえず気になったので聞いてみる。

「自殺志願者」

なるほど、そうきたか…

「…わかりました。　続きをどうぞ」

自殺志願者か…　ってどんだけブラックな物まねだよ！？

「今日はクツがなかったわ…　ミカのしわざね」

先輩はまた自殺志願者のマネを再開した。

「アミは机を隠したわ…」

イジメを苦に自殺を希望するって設定か。

「サユは消しゴムを隠したわ…」

地味だおい。 てかどんだけ陰険な嫌がらせうけてんだよ。

「そして一番許せないのわ…」

いよいよラストスパートか？

「毎日毎日熱っぽい視線を送ってくるリナ！ 耐えられないわ！」

いや、それはイジメとかじゃなくて…

「ここから飛び降りたら楽になれるかしら…」

ああ、変な流れのままシメに持っていくのか。

「鳥はいいわね… 自由に優雅で綺麗で自由で…」

今自由って二回言ったな。

「うるさいわね！」

先輩はとて不機嫌そうな顔をして睨んでくる。

「ええ！？ 何も言ってますんよ！？」

「なんか聞こえたの！ まあいいわ、帰りましょ」

「もういいんですか？」

「あきた」

先輩はそう言い残して屋上から出て行った。

俺は一人屋上に残される。

「…ほんと、自由人だよな」

ま、そこが先輩らしくていいんだけど。

さて、明日はどんなやっかい事を起こすのやら…

第1話 変な先輩（後書き）

どうでしたか？

感想、評価、お待ちしております。

第2話 プレゼント

昼休み。

そろそろ温かくなってきたなあゝなんて思っていると、先輩がまた変な事を言い出した。

「ヒマね」

「そうですね」

昼飯も食い終わり、先輩と俺は屋上で寝転がってだらだらしていた。

「そうだ!」

さて、今度は何をいいだすんだ?

「ヒマだしSOS団でもつくー」

!?

「まってください!! それ以上はだめです!」

ガバッ! っと起き上がって先輩をとめる。

「なんでよ?」

睨んでくる先輩。

「とにかくだめです。そんなどこぞの憂鬱な少女みたいな発言」

「ふん、わかったわよ」

そー言って口をとがらせながらそっぽをむく先輩。

ったく、何をすねてるんだか。

…ん？

何か違和感が…

とゆーよりも誰かの視線を感じる…

俺はあくびをするフリをして、視線を感じる屋上のドアの方を見
てみた。

「…あ」

誰かがドアのすき間からこっちを見ている。

だめだ、一瞬じゃ誰だかわからん。

「先輩」

小声で先輩を呼ぶ。

「なによ？」

先輩はゴロンと転がってこっち側を向く。

「ドアのところに誰がいるんですけど、見えますか？」

「ドア？」

先輩は少し頭をずらしてドアの方をみる。

「……げ」

顔を少し歪ませる先輩。

「…先輩？ あの、聞いてますか？」

「え？ ああ聞いてるわよ」

「それで、ドアの所にいるのは誰なんですか？」

「…モエよ」

「モエって…先輩の妹の？」

よねはら
米原 萌 モエ

同じ高校の一年生。

なぜか俺が喋りかけると顔を真

赤にして、『ご、ごめんなさいっ』とか言ってどこかに走って行ってしまう。

先輩いわく、『乙女心よ！』だそうだ。

ちなみに性格は先輩の正反対、奥手、引っ込み思案、まあおとなしい子だと思っている。

「ええ… あ、そうだ」

急に表情が明るくなる先輩。

何か思いついたんだろう。でも…あの顔は絶対ろくなことを考えてない顔だな。

「シュウ、放課後もう一度ここにきなさい」

「放課後ですか？ でもなんで」

「つべこべいわない！」

「わ、わかりました」

「じゃあ準備があるからもどるわね」

先輩はそう言って立ち上がり、屋上を出て行った。

準備って… いったい今度は何をするつもりなんだ？

…不安だ。

そして放課後。

俺は言われた通り屋上に来てみたけど、

「誰もいない…」

もしかしてすっぱかされたか？

なんて思いつつ、しばらくボーっと遠くの景色をながめていると、

「よくきたわね、待ってたわよ！」

声の方に振り向くと、先輩は腰に手をあてて入口のところで立っていた。

「待ってたのは俺ですけどね。それで何の用ですか？」

「聞いて驚きなさい！ 今日はある人のためにプレゼントを用意してあげたのよ！」

プレゼント？

「えっと… 今日誕生日でもなんかの記念日でもないはずなんですけど…」

「ええ、別に何の日でもないわよ」

自信たっぷりに答える先輩。

「ならなんで…」

「たしかあんた前から妹がほしって言ってたわよね？」

「言ってますん！」

誰かと勘違いでもしてるのか？

「いいえ、あんたは口ではそんなこと言ってるけど目が語っているわ！ 妹がほしい！ とね」

デーン！ って感じで俺に指をさしながら叫ぶ先輩。

バカですか？ ……バカですね。なんて無茶苦茶なことを言うんだ…

「なら、もし俺の目が妹ほしって言ってたとして、妹でもプレゼントしてくれるんですか？」

「そうよ」

平然と答える先輩。

…冗談だよな？

「遠慮します。全力で」

「いいから受け取りなさい！」

強引だな… まあでもプレゼントってのに興味がないわけでもないし…

「わかりました。ありがとうございます。それでプレゼントって何ですか？」

「やっと思いついたわね、好みがあると思うから妹候補をいくつか用意したの、どれか一つ好きなのを選びなさい」

そして先輩はサンタが持っているような白くて大きな袋を取り出し、ゴソゴソと袋に手をつっこんだ。

……って

「その袋… どっから出したんですか？」

「うるさい」

「す、すいません…」

怒られた… なんで!?

なんでもありなんだ…

なんて思いながら俺が関心していると、先輩は袋から何かを取り出した。

「まずはこれよ」

そう言った先輩の手にあるのは：

「いりません！」

リコーダーだった。しかも小学校で使ってたやつだ。先輩が

「んじゃこれ」

次にでてきたのは小学校で先輩が背負っていたランドセル。：
妹候補って言ってませんでした？ 物ですよ？ それ。

「いりません」

「じゃあ次！」

次はスクール水着、たぶんあれも先輩が小学校で使ってたやつだ
ろう：

「いりません！ てゆうかなんでみんな先輩の小学校のときの私物
なんですか！？」

「男ってそっちの方が興奮するんでしょ？」

小首をかしげる先輩。

「残念ながらそんな変な性癖は持ち合わせていません！ そんなマ
ニアックな物で興奮するのはごく一部の人だけです」

「そうなの？」

「そうなんです」

すると先輩は

『うーん…』と少し唸ったあと、頬を赤らめながら上目づかいに俺を見つめ、

「じ、じゃあ私がプレゼー」

「いりません」

「な、まだ何も言っていないでしょー!」

「だいたいわかります。それより他にもっとましな物はないんですか？」

「ふん、最後にとっておきがあるわよ」

あ、先輩がすねてる。 まあいいか。

「じゃあそれでいいんでください。 もうそれもらって帰ります」

そろそろ疲れてきたし、早く終わらせよう。

「ほんとにいいのね？」

「はい。 何でもいいです」

期待なんかしてませんから。

「ならうけとりなさい! とっておきの妹候補! 私の妹よ!」

先輩がそう言いながら体をどかすと、後ろに先輩の妹のモエが立っていた。

おー本物の妹か。じゃあさっさともらって帰ー

「つてもらえるかああ!!!!」

モエがプレゼント!? なんて最後だけ人なんだ!?

「あ、あの…よろしくお願いします」

もじもじと俺の前まで出てくるモエ。

いや、よろしくって言われても…

「ま、そーゆーことで今日からモエはシュウの妹よ!」

どーゆーことだよ…

「んじゃね」

そう言って帰っていく先輩。

「いやいや困ります!!」

「何? 何か不満でもあるの?」

先輩は眉間にシワを寄せて凄んでくる。

「いや、あの、いません」

俺がそう言うと、さっきまでずっとうつむいていたモエが急に顔をあげ、

「モエ、いらないんですかあゝ？」

目をうるうるさせ、泣きそうな顔をこっちに向けてくる。

「違う！ 別にいらないとかじゃないんだ、や、いるわけでもないんだが… ちょっと先輩一 っていない!？」

くそ、いつの間にか逃げられた！

「う、ううゝ」

「おわ!？ ちょ、落ち着けて！ 泣くな、な？ 頼むから！」

俺はその後、半泣きのモエをなんとか落ち着かせ、そのまま家まで送りとどけた。

モエを送った帰り道。 空はもうだいぶ薄暗くなってきた、そんな中を俺は一人で寂しく歩いている。

結局今日は先輩に遊ばただけで終ったな：

てかモエとちゃんと話したのって初めてだよな。あれがちゃん
とって言えるのかどうかは置いといて。まあ先輩と違っていい子
そうでなによりだ。

でもなんで先輩は俺にモエを押し付けて帰ったんだろ：

ただの嫌がらせか？

謎だ：

第2話 プレゼント（後書き）

なんか手を加えすぎて逆に読みにくくなっているような…

ま、気にしないでいこう！

第3話 でーと？ その1

今日は日曜日。朝起きると先輩からメールがきていた。

「んん」

のびをし、眠い目をこすりながら携帯の画面を見る。

『12時にこうもん』

12時に肛門？ …あ、12時に校門か。12時に校門に来て
ってこと？ 相変わらず先輩のメールは内容がわかりづらいな。

なんて考えながらふと時計をみる。

…時計の針は11時45分をさしていた。

「…やば」

家から学校まで急いでも10分はかかる。

俺は急いで用意をすませ、学校まで走った。それはもう凄く走
った。

「ハア…ハア…間に、合った…」

ぎりぎり12時に間に合った。　まだ先輩は来てないな。

「あ、あの…」

遅刻したら先輩に何言われるかわかったもんじゃない。　自分はいつも遅刻するくせに。

「えと、うう…」

にしても遅いな。　急に呼び出しといて、まあ呼ばれてのこのこと来てる俺も俺なんだが。　また変なことでも思いついたのか？

「あの！」

「うわっ!？」

振り向くとそこには私服のモエがいた。

「やっと気付いてもらえた…」

「なんだモエか。　びっくりした…　急に脅かすなよな」

俺がそう言うのとモエは、軽く口ごもりながら、

「さっきからずっと呼んでましたよ」

と舌ったらずの声で言ってきた。

てかなんでさっきから俺と目を合わせようとしなないんだろ。

「そなの？」

「はい」

ってあれ？　なんでモエがここにいるんだ？

「そーいえばなんでここにいるんだ？　誰かと待ち合わせでもしてるのか？」

「はい　12時にここに来るように言われたんですけど…　こないですよ」

ちなみに今はもう12時10分だ。

「そーなのか。　俺もここで待ち合わせてるんだけど、相手がこないんだよ」

「あ、同じですね」

なぜか嬉しそうなモエ。

「だな」

偶然、な訳ないよな…　ああ、嫌な予感がする…

「なあ、もしかしてここに来て言ったのって…」

「お姉ちゃんです」

やっぱりか… いったいあの人はどーゆーつもりなんだ。

あ、先輩からメールだ。

『今日は一日モエとデートさせてあげるわ』

デート？ なるほど、これが目的だったのか。

返事を返す。

『けっこーです。 呼び出しといて来ないなんていったいなんのつもりですか？』

『呼び出したけど私が待ってるとは言っていないわ。 以後、質問は一切受け付けないわよ』

くそ、はめられた…

「どーかしたんですか？」

どうしようか考えていると、モエが声をかけてきた。

ああそうか、モエは先輩にはめられた事に気付いてないのか。

よし、モエに本当のことを話して今日は帰ろう。 先輩の思い通りにばっかりなっていたまるかったの。

「なあモエ。 実は俺達先輩にだまさー」

へらんらん、らんらんらんらんらん

突然、どこかで聞いたことのあるような歌が俺の言葉をさえぎった。

な、なんだ!?

「あ、ごめんなさい。電話です」

なんだモエか。 てか着信音ナウ○かなのか!?

それになんてタイミングの悪い電話だ。 まるでわざと俺の邪魔をしてるみたい…。 まさか!?

「うん、うん、わかった。じゃあね」

「お、おい、今の電話の相手って…」

「お姉ちゃんからでした」

しまった…。 さすが先輩、仕事が早いな。

って関心してる場合じゃないな。

「先輩なんて言ってた?」

モエは携帯をバックにしまい、頬に指をあてながら少し考える仕事をした。

「えっと、三人で遊ぼうと思ってモエとシュウくんをここに呼んだらしいんですけど、急用で遅れるから先に二人で遊んでて言ってました」

「そ、そうなんだ。それじゃあしかたないな」

やられた… これじゃ帰れないな… しかたない、少し付き合うか。

「ってことはシュウ君と二人きり… ひゃあ！」

モエが何かを呟き、顔を真っ赤にしてしゃがみ込んだ。

「どーしたんだ!? 腹でも痛いのか？」

俺がしゃがみ込むモエに近こうとすると、

「な、なんでもないです!」

と言って急に立ち上がった。

「ああそう?」

姉妹そろって元気だなあ。

「はい」

「お、おう…」

モエはうつむいたまま相変わらず目を合わせようとしなない。

き、気まずい… 先輩、助けてください! どーせどっかから見てるんでしょ!?

先輩からメールがきた。

『YES』

人の心なんてよんでないで助けてください！

『お昼』

お昼？ ……そうか！

「あのさ、ボーっとしてるのもなんだし、とりあえず昼飯でも食べに行かない？」

とモエに提案してみた。

「ああダメですよこんなところでっ。でも…シュウくんなら」

しかしモエはなんだか一人で危ない世界に浸っていた。俺なら、なんなんだ？

「おーい、なんか色々大丈夫か？」

「ひゃっ！？ はははいい！ お昼ご飯ですね行きましょう大賛成です行きましょう！」

俺の声でこっちの世界に戻ってきたモエは、かなりテンパリながらどこかに向かって歩きだした。

さすが、先輩の妹だけあってモエもなんか…変だ。

「ちょっと待った！　まだ何食うかも決めてないのにどこ行くんだよ？」

するとモエはピタリと立ち止まり、とてもぎこちない笑顔でこちらに振り返った。

「は、はは…　ごめんなさい…」

ええ！？　何で！？　何で謝るんだ！？

「えっと、なにか食べたい物とかある？」

「シュウくん…」

「へ？　俺？」

声が小さくてよく聞こえなかったが、確か今シュウくんって言ったような…

「いやっ！　ち、違います！　シュ…シューマイが食べたいなあ〜と思って！」

なんだ、シューマイか。

「おっけ、じゃあ行くか」

「は、はいっ」

シューマイかあ、ラーメン屋にでも行くか。

そして俺達はラーメン屋に向かって歩きだした。

にしてもモエってイメージしてたのと違うな。　なんか喋る時と
かもぎこちないし、もしかして嫌われてんのかな…

あ、先輩からメールだ。

『鈍感』

なにがですか？

第3話 でーと？ その1（後書き）

続きます。

第4話 でーと？ その2

「うまいな」

「ですね」

俺達はあれから10分ほど歩いたところにあるラーメン屋で昼飯を食うことにした。

俺もモエもしようゆラーメンだ。 なかなかうまい。

ただ一つ失敗してしまったことがある。

それはラーメン屋にシューマイが置いてなかったということだ。よくよく考えてみれば俺にはラーメン屋でシューマイを食った記憶がない。 まあ、モエも気にしてないみたいだし大丈夫だろう。

「あ、そうそう」

「はひ？」

ラーメンを口に入れた状態のままこっちを向くモエ。

「ああ悪い、先にそれ飲み込んでくれ」

「わかりまひは」

「いやだから早く食えって」

「ひゅいまひえん」

「……」

こいつバカか？

どんと胸のあたりを叩き、口の中のものを無理矢理飲み込んだモエ。

「それで、どうしたんですか？」

はあ、やっとか。

「あのさ、同い年だしその敬語はやめないか？」

そう言うともエはきょとした顔になり、

「モエ、敬語になってますか？」

何を言ってるんだこの天然娘は…

俺は軽く呆れながら答える。

「ああ、なってる」

「ううゝ、すいません…」

うつむきながら謝るモエ。

「それだそれ！ ごめんでいいって」

なんか俺がいじめてるみたいだな。

「はい：　じゃなくて：　うん？」

「まあ無理に直さなくてもいいけどな、それはそれでモエらしくていいかもしれないし」

急に変わろと言われても難しいだろうしな。

「モエらしい。　ですか？」

首をかしげながらこつちを見てくるモエ。

なんか、かわいいな。　って何を考えてるんだ俺は：

「ああ、雑な先輩と違って丁寧でモエらしいよ」

俺がそう言うのとモエは顔を赤らめ、照れだした。

「えへへ」

なぜ照れる！？　そんなに嬉しいことか？

ここで先輩からのメールを受信。

『死ね』

なぜ！？　何かしたか俺！？

「あの、顔色悪いですよ？」

心配そうに見つめてくるモエ。

「あ、いや、なんでもない！　それよりそろそろ行こうか」

「はい」

ちなみに飯代は、先輩の指示で俺が払われた。

まあ別にいいんだけどな。　だいたい予想はしてたし。

そして俺達は店を出たあと、特にすることもなかったので近くにあるショッピングモールをぶらぶらすることにした。

途中、先輩から『手、つなぎなさい』とメールがきたが、もちろん無視することにした。

二人で並んで歩く姿は本当にカップルのようだ。　…だけど会話が
ない、気まずいな。　何とかして会話を生まないと。

そして俺はベタに、

「モエって好きな人とかいるのか？」

と自然に聞いてみた。

「へ！？ いやっ！ あの、その…」

なぜかテンパるモエ。

あれ、変なこと聞いちゃったか？

「あ、言いたくなかったら言わなくていいからな？」

「そ、そうじゃないんですようゝ モエはシ、シュウ君、が… うゝ」

モエは顔を真っ赤にしながら下を向いてしまった。

やば、さすがに年頃の女の子に好きな人を聞くのはまずかったか。

とここでまたメールがきた。

『殺』

こわっ！？ 怖いですって！ 確かに今のは俺が悪かったですけど。

『そこじゃない』

へ？ じゃあなんなんだ？

『自分で考えなさい』

何かしたかあ…？ 俺。

「あの…」

何のことか考えていると、モエが声をかけてきた。

「ん？ どした？」

「楽しく…ないですか？」

モエは今にも泣きそうな顔で聞いてきた。

「そんなことないって！ 楽しくなさそうだったか？」

「はい、なんか難しい顔してました…」

おっと、ついつい一人の世界に入ってしまったたな。

「わるい！ ちょっと考え事をしてて」

両手を合わせ、少し頭を下げる。

「本当、ですかあ？」

「ああ本当だ」

だからそんな目をうるうるさせないでくれ。

「なら、よかったです！」

ニコツと笑顔になるモエ。

「おう、お詫びに何かおごるよ。 何がいい？」

「い、いいですよそんなの！」

両手をブンブンしながら断るモエ。

「本当にいいのか？ 遠慮しないでいいぞ？」

「あ、えと、じゃあ…」

そう言いながらもじもじとするモエ。

「なんだ？」

『裸になって幼稚園に乗り込んでください！』

先輩は黙っててください。

俺は先輩からのメールに心の中でツツコミつつ、モエが口を開くのを待った。

「今度、今度シュウくんの家に遊びに行っていていいですか？」

「いいけど、そんなのでいいのか？」

「はい！ いいんです！ それがいいんです！」

なぜか必死になるモエ。

「ならいいけど。でも別に何もない普通の家だぞ？」

「いいんです！ 楽しみに待ってますね！」

モエはなぜかとてもテンションが上がっている。

そんなに喜ばなくても… 何を想像したのか知らないけど、変にハードルを上げられてがっかりされても困るような…

〈らんらん らんらんらんらん〉

とここでモエの電話が鳴る。

「あ、お姉ちゃんからだ」

なに、今度は何をするつもりだ？

「もしもし… うん。そーなの？ わかった」

電話を終え、携帯を閉じたモエに恐る恐る聞いてみる。

「先輩、何だって？」

「ちょっと緊急事態だから帰ってこいって」

「そ、そうか」

ってそれだけ、か？

「えっと、じゃあ…」

口ごもるモエの変わりに俺が一言。

「んじゃ帰るか」

「…うん！」

一瞬だけ悲しそうな顔を見せるモエ。

まだ遊び足りないのか？

そのあと俺はモエを家まで送り届け、自分の家に着いた頃にはもう日が半分沈んでいた。

にしても最後の電話、珍しく先輩が変なことを言わなかったな。

まあ、それにこしたことはないんだが。

後日、先輩が『わかる乙女心！』とゆう本を俺に買ってくれたが、意味がわからなかったので、俺がこの本を読むことはなかった。

第4話 でーと？ その2（後書き）

第5話 個性ってなんだ？

「平和だ」

最近、昼休みは屋上でダラダラするのが日課になっている。

今日も屋上で大の字に寝転び、空を眺めながらゆったりしている。

どーせすぐに騒がしくなるんだ、今のうちにこの平和な時間を満喫しよう。

「シュウ！」

噂をすればなんとやら、屋上のドアを勢いよく開け、先輩が現れた。

「今日も元気ですね」

「ええ、それよりもあんたには失望したわ！」

寝転んでる俺の顔を先輩が覗きこんでくる。

「はい？」

「昨日のことよ！」

昨日のこと、といえば…

「先輩がモエと俺を無理矢理デートさせたやつですか？」

「そうよ!」

「それがどこかしたんですか?」

「私はベタが嫌いなの」

誰も先輩の好き嫌いなんて聞いてない。

「そうなんですか。それは知りませんでした」

眠いので適当にあしらう。

「まじめに聞いてんの!?!」

先輩の額にシワが集まる。

やば、ちょっと怒り気味だ。

「聞いてますよ。　　いったいなんなんですか?」

「なんなんですか?　　じゃないわよ!」

むかつく感じに俺のセリフを繰り返す先輩。

もしかして今の、俺のマネか?

「とにかく!　私はシュウが最近ならお約束というくらい多い、女の子の気持ち全然わからない鈍感主人公だったってことに失望してるの!」

は！？ シュジンコウ？ なんだそれ！？

「すいません。 言ってる意味がよくー」

俺はそう言いながら上半身を起こす。

「うるさい！ あんたには個性がないのよ！ 主人公は個性が命！
あんたは地味よ、地味！」

俺を勢いよく指差す先輩。

ああ先輩、あなた今思いっきり俺の目ついてますよ。

てゆーか、

「地味って…」

ちよつとショックだったりして…

「あんたもちよつとはね、撲殺なドクロの宮○君なり、憂鬱な○泉なり、ラッキーな白○みのるなりを見習いなさい！」

「あの、それ全部主人公じゃない気がするんですけど…」

「細かいことは気にしない！」

「はあ…」

くそ、なんか悔しいな。

「個性がほしかったら必殺技でも身につけなさい！」

先輩が人差し指をひらひらさせながら、またトンデモ単語を言っている。

「必殺技、ですか？」

「そうよ、一流の執事たるもの、必殺技の一つや二つ持っていて当然よ？」

ああ、話についていけない… 執事とか訳わかんないこと言うてるし。

「あの、そもそも個性なんてどーにかできるもんなんですか？」

先輩は俺の質問を鼻で笑い、

「甘いわね！ そんなもんどーにかするに決まってるじゃない！」

さも当然のように言い放った。

「なら、どーすればいいんですか？」

「そうね… 語尾になんかつけてみたら？」

「例えば？」

「いざむるとか」

「嫌ですよそんな武士みたいな語尾」

「じゃあニャン」

「ベタです」

ベタは嫌いなんじゃなかったのか？

「んゝ 星ならどう？」

「星？」

「それなら誰もやってないでしょ？」

そりゃそーだろ。

「星なんて語尾につけてもなにも変わらない気が…」

「あんたなにか勘違いしてない？」

「なにがですか？」

「星は星でもこの星よ」

そう言って先輩は屋上に落ちていた石で壁に『☆』の絵を描いた。

ああ、星マークのことか。

「じゃ、さっそく言ってみて」

相変わらずすごい無茶振り…

「星マークの発音なんてできません」

「ええ!？　ほんとに言ってるの!？」

いや、そんなびっくりされても。　できなくて当然だから。

……できないよな？　普通。

「ほんとです。　そもそもこの世に星マークの発音なんてできる人がいるんですか？」

「いるわよ」

まじかよ…

「そんなおもしろ人間、どこにいるんですか？」

「後ろ」

俺の後ろを指差す先輩。

「へ?」

俺は後ろを振り返る。

そんなベタな展開があるわけ一

「あの、こんにちは」

いた。

モエがいた。

セミロングの髪を左右で二つくりにしたモエがちょこんと立っていた。

「お前… いつからそこにいたんだ…!?!」

するとモエは相変わらずの甘い声で、

「シュウくんが『平和だ』って言ってたところからですう」

と言った。

始めからじゃねーか… 全然気付かなかったぞ。

「それで… 星マークの発音ができる人ってモエのことですか?」

「そうよ、さあモエ、あのセリフ言うのよ!」

先輩はビシッとモエを指差した。

するとモエは一度深呼吸したあと。 口を開いた。

「いきます! きゃあ!?! さ〇ら君の体がバラバラになっちゃった! ぴるぴるぴるぴる〇ぴ☆」

どこから取り出したのか、木の枝を振り回しながら例の呪文を唱

えるモエ。

「うわ…」

あいたたたあゝ さすがにこれはちよつと…

「そ、そんな目でみないでくださいゝ モエは、モエはがんばりま
したよお！ う…うわあああん！」

モエは泣きながら屋上から出て行ってしまった。

あいつ、いったい何がしたかったんだ？

「最低ね」

「ええ！？ 俺のせいすか！？」

先輩が冷めた声で呟く。

「まあいいわ」

いいのか！？

「先輩、もう語尾はあきらめましょう」

語尾なんて元からつける気なんてないし。

「そうね、他の手を考えましょ」

「まだやるんですか！？」

「あたりまえじゃない」

「めんどくさいんでいいですよ。それじゃ俺は教室に戻ります」
変なこと言われる前に早く逃げないとな。

教室に戻ろうとドアに向かって歩きだそうとすると、先輩が俺の肩を掴んだ。

あ、なんかデジャブ。

「わかったわ！」

俺の前に回りこんでくる先輩。

…顔が近い。

「なにがですか？」

「シュウに足りないものよ」

俺に足りないもの？

「なんです？」

どーせ野菜とかくだらないこと言うんだろうな。

「たまには自分で考えてみたら？」

うわ、顔がマジだ。

俺に足りないものか…… あ、

「わかりました」

「なに？」

「優しくてまともな先輩です」

「……………」

黙って睨んでくる先輩。

なんて眼力、それにすごいプレッシャーだ…

「なんかすいません…」

先輩を怒らすと後が怖いからな。

「わかればいいわ。ちなみに答えはツツコミよ」

ツツコミって、ボケとツツコミのツツコミか？

「あのツツコミですか？」

「そう、シュウのポジションはツツコミ以外考えられないのよ！」

ポジションってなんだよ…

「でも俺ツツコミなんてできませんよ？」

「だから言っただけだよ。できるなら足りないとか言わないわ！それでツツコミの先生を用意したわよ」

「またですか？」

「ええ、後ろにいるわよ」

「またか!？」

俺はシュバツと後ろを振り返る一

が、そこには誰もいなかった。

「うそよ。残念ながらツツコミの先生はみつからなかったわ。それは自分で勉強してちょうだい」

肩をぽんぽんと叩きながら言う先輩。

「……………」

なぜそんなくだらない嘘をつくんだ…

「んじゃ戻るから」

そう言って先輩は屋上を出て行った。

…くそ、なんだこの敗北感は。

すっげえ負けた気がする。

ツツコミか… 考えておこう…

第5話 個性ってなんだ？（後書き）

あゝ 誰か感想とか評価とかアドバイスとかしてくれないかなあ
：

あ、どーも僕です。

さあ！ どんどん更新していきますよー！！！！

第6話 新キャラの季節

クラスに一人はいるお調子者。

「どしたんや〜？ えらい変な顔して」

それがこいつ、谷口^{たにぐち}和馬^{カズマ}だ。同じクラスで、中二の時に俺が通っていた中学に転校してきて以来、ずっと親友をやっている。親の都合で何回も引越しを繰り返してるせいか、喋り方が変だ。

昼休み。俺が購買で買ったパンを食べていると、カズマが喋りかけてきた。

「別に普通だ。あと変な顔はしていない」

「おっとわるいわるい。変な顔やなくて暗い顔やった」

カズマは俺の前の席に後ろ向きで座る。

「どーやったらそんな言い間違いするんだよ」

「まあ気にすんなよ。ってか今日はアヤカさんのところ行かへんのか〜？」

俺のパンを奪い、食べようとするカズマ。

「別に俺が行ってるんじゃないくて、俺が行くところに先輩が現れるだけだ」

それをさせまいとカズマの手からパンを奪い返す。

「それって一緒ちゃうん？」

パンを奪い返され、諦めるふりをしてもう一度パンを奪おうと手を伸ばすカズマ。

「全然違う。別に俺はっと、あんパンはやめろ！」

「ふふふ… このあんパンの命が惜しくば、代わりにそのいちごジャムパンをよこすのだ」

「チッ しかたない」

俺は人質にとられたあんパンを助けるべく、しかたなくいちごジャムパンをカズマに渡すことにした。

「サンキュ！ てかさ、前々から思ってたんやけど」

パンを食いながら起用に話すカズマ。

「シュウ、お前はツツコミのスキルを手に入れた方がええと思うねん」

な！？ ツツコミって… こいつ、昨日の先輩と俺の会話聞いたのか？

「急にどーしたんだよ？」

「いやな、前からずっと思ってたんだけどタイミングがなかなか

くてな」

カズマまで俺にツツコミをしろいうのか…

「そうなのか… ツツコミって、難しいか？」

「お、食いついたな。 ツツコミできるようになりたいか？」

なぜかマジ顔のカズマ。

「ま、まあちょっとくらいなら…」

「ほな行くで！ ツツコミの練習や！」

そう言うとかズマは持っていたパンを口に押し込み、勢いよく立ち上がった。

「行く？ ってどこに？」

「んなもん決まっとるやないか！」

こうして訳もわからないまま、俺はカズマに拉致られた。

「着いたで」

俺がカズマに連れてこられた場所、そこは一

「なぜ、屋上なんだ？」

屋上は基本的に立入禁止だ、前までドアにもカギがかかっていた。なのでまずここに来ようなんて思うやつはいない、はずなんだが…

なぜこのカギが空いてると知ってるんだ？

「練習といったら屋上やろ？」

いや、違うだろ。

「で、お前はいったい何がしたいんだ？」

「ツツコミの練習に決まってるやん！」

…そーなんだ。

「練習って… 何するんだよ？」

「んー そやなあー 今からオレがボケるからそれにツツコんでくれ！」

「どーやってツツコんだらいいんだよ？」

「んなもん適当でええねん！」

「わ、わかった」

なんでこいつこんなに張り切ってるんだろ… ちょっとうざいかも。

「よっしゃボケるでえー！　ってなんかめんどくさなってきたなあ、やっぱやめへん？」

「は？　別にやめるならいいけど」

「このドあほ！！！」

「ぐあ！」

急に俺を殴りとばすカズマ。

「何すんだよ！？」

「とんだおとぼけさんやなあオイ」

カズマは倒れた俺に馬乗りになり、俺の胸ぐらをつかんで少しだけ引き寄せる。

「ちょ、顔が近い」

「今のはなあ、今のは」

だめだ全然話を聞いてない…

「今のはボケやあ！！！」

俺の顔の前で力いっぱい叫ぶカズマ。

うわ！？　唾が！？　汚ね…

顔中に唾をとばされ、へこむ俺を無視してカズマは語り出した。

「今のはな、オレがボケるぞ！　って気合い入ってたのに、急にやる気なくなっただに『どないやねん！！』　ってツッコむところやろ？」

そーなのか、ってわかるか！？

「とりあえずその、すまん」

「まあまだシユウにはレベル高すぎたかもしれんなあ。　　ってもうこんな時間やないか！？　　授業始まってまうで！」

何もない腕を見ながら慌てる仕草をみせるカズマ。

腕時計のつもりなのか？　　ならツッコまないとな。　　よし。

俺は起き上がり小さく気合いを入れ、全力でツッコんだ。

「それ、別に腕になんもついてない」

〈キーコーンカーンコーン〉

しかし俺の全力のツッコミも、昼休みの終わりをつげるチャイムにより消失した。

「……………」

「……………」

「……さ、戻ろかな。まあ続きはまた今度な！」

そー言ってカズマは屋上を出て行った。

ったく、どーしてこーどいつもこいつも自分勝手なんだ…

「…やば」

俺も遅刻じゃねーか。

第6話 新キャラの季節（後書き）

ども、ミンチです。

新キャラですね。

いや、別にそれだけです（ω、）

第7話 試作品（前書き）

更新遅れて申し訳ありません！！

第7話 試作品

日曜日。

朝、目が覚めていつも通り二階の自分の部屋から一階のリビングへ行く。冷めたご飯がテーブルの上のっている。いつもと同じだ。親は共働きで家には誰もいない。これもいつもと変わらない。洗面所へ行き、鏡にうつった自分の顔を見る。今日も相変わらず無愛想な顔だ。今日もいつもと同じだな。

…いや、何か違う、いつもと何かが違う気がする…

なんだ、この違和感一

「暗いわ！」

「うわっ!?!? せ、先輩!?!」

いきなりの怒鳴り声と共に、先輩が背後に現れた。

「暗いのよ! 始まり方が! コメディーでしょこれ!」

は? コメディー?

ってかなんで先輩が家にいるんだよ!?

「どっから入ったんですか!?!」

「合いかギョ!」

そう言って自慢げに我が家の合いカギを俺につきつける先輩。

「どーして合いカギなんか持ってるんですか!？」

「つくった」

平然と答える先輩。

合い鍵なんていつの間に：

「そんな軽々しく言わないでください。 犯罪ですよ？」

「うるさいわねー 男のくせに」

「男とか女とか関係ありません。 とにかくこれは没収しときます」

目の前にある先輩の手からカギを奪い取る。

「あ、返さないよう！」

両手を伸ばして鍵を奪い取ろうとする先輩。

「ダメです」

「じゃあいいわよ！」

あれ？ 今日はいきなりめがいいな。

「まだいっぱいあるし」

「なんか言いましたか？」

「何も言っていないわよ？」

両手を大袈裟に広げてとぼける先輩。

「ですか。それで、こんな朝早くから何の用なんですか？」

「知りたい？」

目をキラキラと輝かせる先輩。

ああ、嫌な予感がする…

「知りたくないです」

「なら聞きなさい！」

結局言うんだ…

「今日はこれで遊ぶわよ！」

そう言った先輩の手には、いつの間にか首輪みたいな物と、携帯電話みたいな物が握られていた。

「…それ、どこから出したんですか？」

「さあね。とにかく行くわよ！ 5秒で用意しなさい！」

なんて無茶をマジ顔で言う先輩。

「無理です」

「やってみないとわからないでしょ！ さあ早く！」

先輩が急かすので、俺は仕方なく用意を始めた。

「はあ、わかりましたよ。 今から用意しまー」

「はい5秒たったあ！ さあ行くわよ！」

「ええ！？ ちょ、ま、無理ですって！ まだ何もしてない」

〈ゴン〉

「ぐあ！」

突然後頭部に衝撃が走り、俺はそのまま意識を失った。

「う…ん？」

「…あ」

目を覚ますと、なぜか目の前に先輩の顔があった。

「…何、してるんですか？」

「あ、わ、ち、違うのよこれは！」

先輩は顔を真っ赤にし、すごい勢いで後ろに跳んで俺から離れた。

「何が違うんですか… てゆうかここ、どこですか？」

周りをみるとそこは近所の公園だった。公園はそれなりに広く、ブランコやすべり台などの遊具がある所と、何もない芝生のみのも広場とがある。

そして俺は今、芝生の上に寝転がっている。

あれ… さっきまで自分の家にいたような…

「違うのよ？ 私は寝顔がかわいかったからちよつと見てただけで、別にその、キ、キキキ、クスしようとしたとかそんなじゃないからね？ 本当よ？ でも、あともうちよつと時間があつたら… ふふふ…」

先輩はなにやらぶつぶつと呟き、一人の世界に入り込んでしまっている。

「先輩、聞いてますか？ おーい」

完全に無視だな。なんかこーゆうところ、モエに似てるかも。

しかたない、とりあえず起きるか。

そう思い、重い体を動かしかんとか立ち上がる。

「ぐあ！」

しかし立ったのとほぼ同時に頭に激痛が走り、俺はその場に膝をついて崩れた。

「だ、大丈夫!？」

俺の声を聞き、こっちの世界に戻ってきた先輩が心配して駆け寄ってくる。

「正直、大丈夫じゃないです。　ところで先輩」

「な、何よ？」

「俺に、何かしましたか？　記憶がない上に、後頭部にとっても激しい痛みを感じるんですが」

「別に何もしてないわよ？」

「ならなぜ俺と目を合わせようとしませんですか？」

「そんなことないわよ？　そ、それより早くこれで遊びましょ！」

先輩は強引に話題を変え、さっきの首輪と携帯電話みたいなものを取り出す。

「はあ、ところでそれ、いったいなんなんですか？」

「これ？　これはねー」

先輩は首輪& a m p; 携帯電話
みたいな物の説明をしてくれた。

「つまり、先輩の知り合いが勤めてる会社の新商品であるその犬^ほ
語翻訳機^{んやく}を実際に使って、ちゃんと作動するか確かめればいいわけ
ですか」

「そーゆこと。　この首輪を犬につけると、こっちの画面に犬の言
ったことがでてくるのよ」

「へえ」

ちょっと面白そうだな。

「じゃあさっそくそこらへんの犬にこの首輪をつけてきてちょうだい！」

首輪を俺に手渡し、にっこりとはにかむ先輩。

「…やっぱり、俺が行くんですか？」

まあなんとなくわかってたけど。

「当たり前じゃない！　なんのためにあんたを呼んだと思ってるの
？」

「一人じゃ寂しいから」

「ぼっ、ばか！ そんなじゃないわよ！」

あれ、もしかして図星か？ いや、先輩に限ってそれはないよな。

「ほら！ 早く行きなさい！」

「はいはいわかりました」

顔を赤くした先輩に急かされ、俺はしぶしぶ犬さがしに出発した。

「いない」

その後、10分ほど周りを探したが犬はみつからなかった。

しかたない、先輩の所に戻るか。

「お、シュウやないか！」

先輩の所へ戻る途中、俺は聞き覚えのある声に呼び止められた。

「ん？ なんだカズマか」

振り返ると同じクラスのカズマが、ジャージのズボンにTシャツとゆーラフな格好で立っていた。

「なんやいきなりひどいこと言うなあ。　　ってかこんなとこで何してるん？」

「見てわかるだろ」

俺は大袈裟にため息をつき、首を振る。

「ああアヤカさんか　二人とも本間仲ええなあ。　　んで今日は何させられてるんや？」

「野良犬を捕まえろってさ…　　あ」

いいこと思い付いた。

「カズマ、ちょっとばかり頼みがあるんだが…」

「ん？　　なんや？」

「行ってきましたよ」

「遅い！　　それで犬は捕まえてきたんでしょうね？」

先輩はこちらには振り向かず、犬語翻訳機をいじりながら返事をする。

「はい、これです」

そう言って俺は犬、に成り切ってよつんばいになっているカズマを先輩に差し出す。

「わん！」

カズマの鳴き声を聞いた先輩は、一瞬ビクツとして驚いたあと、ゆっくりとこちらを振り返った。

「…へえ、犬、ねえ…これが？」

「は、はい…」

俺はギロリと睨みつけてくる先輩から目をそらす。

「ほれ」

「へ？」

「お手しなさい、お手。さあ早く。犬ならできでしょ」

「う…」

先輩はカズマの前に手をだしてひらひらさせる。しかしカズマは人間としてのプライドが邪魔をしているのか、なかなかお手をしない。

なんて挑発的な：

「まったく役に立たないわねえ！　ちよつとでも期待した私がバカだったわ！」

しかしカズマがお手をするより早く、先輩は痺れを切らして立ち上がる。

そしてカズマを道に転がっている小石でも見るような目で見下し、一言。

「お手もできないなんて犬以下ね！　この豚野郎！」

先輩はどこぞの女王様よろしく、カズマに冷たく言い放った。

「ぶ、豚野郎…やて！？　さすがアヤカさん、相変わらずなかなかのドSっぷりやな…」

「……」

しかしカズマの挑発もむなしく、先輩はカズマを無視してポケットから笛のような物を取り出した。

「ええ！？　無視！？」

無駄に吠えるカズマ。

「なんですか、それ？」

「犬笛よ。知り合いの人が困った時は使いなさいって機械と一緒に渡してくれたの」

「なら先にだしてくださいよ…」

俺の努力はなんだったんだ… まあ別に何もしてないけど。

「忘れてたのよ。まあみてなさい」

そう言って先輩は悪ぶれる様子もなく、犬笛を吹いた。が、何も聞こえない。確か犬笛って人間には聞こえないんだったよな。

そして待つこと20秒。

「何もおこりませんね」

「そんなはずないわ!」

そしてもう一度、先輩が笛を吹いた。

すると一匹の犬が向こうから凄いスピードで走ってきた。

「おお、本当にきた」

本当に犬笛で犬を呼んだのか？

しだいに走ってくる犬の姿がどんどん大きくなっていく。つまり近づいてくる。

白い毛に被われた犬だ。その目はまるで獲物を狙う獣のように

異様にギラついている。

そして俺の目の前、走ってきた犬は減速するどころかどんどんス
ピードを上げ、そのまま横にいたカズマめがけて華麗に跳んだ。
当然、カズマはそれを避けることもできず――

「グホウ！」

奇怪な叫びを上げ、犬もろともに後ろに吹き飛んだ。

…この犬、今の絶対わざとだよな。

白い毛の犬はカズマの上ですぐに起き上がり、先輩の足元に行っ
ておすわりをした。

「よしよし、よくきたわね。 あんたは…柴犬ね」

先輩は犬を撫でながら話しかける。

カズマのことは無視なのか？

「さあシュウ、早く首輪をつけなさい！」

「わかりました」

じっとおすわりをしている犬に首輪をつける。

「つけましたよ」

「よし、じゃあなにか言ってみて、お父さん」

「お父さん！？ …もしかしてこの犬の名前ですか？」

「そうよ、白いし柴犬だし」

まんまパクリじゃないか… ソートバンクの。

「さすがにお父さんはマズイです。他のにしましょう」

「じゃあ…：役立たず」

今、一回カズマを見てから言ったよな。

「ちよおつと待ったああ！！ …もしかして役立たずってオレのこと
っすかあ！？」

そう叫びながらカズマは立ち上がり復活する。

「よし！ んじゃあんたの名前は、ナメ太郎にしましょ！」

「無視！？」

カズマはそのまま四つんばいになって崩れた。

忙しいやつだな。

てゆーかなメ太郎って… 可愛いそすぎるだろ。

「ワン」

「「あ」」

吠えた。

「なんて言っただんですか？」

先輩の横に行き、機械の画面を覗き込む。すると画面にピピッと文字が出る。

『ああ： 地球、滅びねえかなあ：』

こわッ!?

何言っただこの犬!?

「…これ、言ってること合ってるんですか？」

「ええ： 知り合いの人が間違えることはないって言ってたわ」

ってことは本当か：

「犬が地球の滅亡を願うなんて、世も末やな」

突然、先輩と俺の間にカズマの顔が現れた。

「ひゃ!?! あ、あんたいつの間にか復活したのよ!?!」

「今っす。にしてもこんなこと言うなんてナメ太郎、お前…なんかあったんか？」

カズマは優しくナメ太郎に声をかける。

「ワン！」

お、返事したのか。 なになに：

画面を覗く。

『うっせえ！ 馴れ馴れしいんだよ！

うわ： 荒れてんなあ、こいつ。

「まあ落ち着けよ、オレでよかったら愚痴聞いたるで？」

それでもカズマは優しく声をかける。

「わんわんわん！」

〈ピピッ〉

『しつけえんだよこのエセ関西人が！ ちゃんとした関西弁話せ！』

やば、この犬： カズマが気にしてることを：

「こんのクソ犬ウウ！！」

キレたカズマは犬に飛び掛かろうと腰を落として狙いを定める。

「ちょ、待ちなさい！ 犬の言ってることを真に受けてどーすんの

よ？」

しかしカズマは先輩の言葉で動きを止める。

「た、確かにそーっすけど…」

「そんなことくらいで怒るなんて本当に犬以下よ？」

確かに。

「…で、ですよーね！？ たかが犬の言うことやしな！ そや！ オレは人間やから犬の言うことなん気にしやんでえ！」

カズマは自分に言い聞かせるように何度もそのセリフを繰り返す。

「わんわん！」

「今度はなんや？ ま、オレは犬の言うことなんどーでもいいんやけどな！」

カズマは無駄に声を大きくして言いながら、画面を見る。

『情けねえなあお前。 男のくせに女の言うこと聞いてよお。 それでも男か？ ちゃんと《ピー》ついてんのか？ どーせついててもも小さいんだろ？ 粗^ビ野郎！』

「「うわ…」」

先輩と俺の声がハモる。

この犬… かわいい顔してなんてことを… ああやばいぞ、カズマからどんよりとした変なオーラが一

「一一一コロス」

「え？ 今何て言っ一」

「キエエエエエー！！！」

カズマは目をギラリと光らせ、ナメ太郎にまた飛び掛かろうとする。

「カ、カズマ！？ まて！ 落ち着けって！」

暴れるカズマを後ろから羽交い締めにして押さえこむ。

「はっなっせっ！！ おいクソ犬ウ！！ お前も男やったらわかるやろ！！ そこは全然汚したあかん男の聖域なんや！！ 絶対にふれたらあかんのや！！！！ それとなあ！！ オレの中学の時のあだ名はジャン棒や！！！！！！！！」

俺の腕の中で暴れながらカズマは叫ぶ。

「な！？ カズマ、お前…」

そのあだ名は封印したんじゃないのか！？

「はあ… はあ… ハッ！？ しもた！？ つい頭に血がのぼって…」

「「……………」」

俺と先輩は言葉を失い、沈黙状態。

「あの、えと… アヤカさん？」

沈黙に耐え切れず、先輩に助けを求めるカズマ。すると先輩は、

「ぶっ！」

いきなり吹いた。

「あはははは！！　じ、ジャン棒？　あはは！　や、やめてえ！！
お腹痛い！あはははは！！！」

先輩はお腹をおさえて大笑いしました。

まあ、しかたないよな…

カズマは笑われたのがショックなのか、声を出さずにピクリとも動かない。

俺はとりあえず先輩が落とした機械を拾い、何気なく画面を見る。
すると新しく文字がでていた。

『なんだ…　その、悪く言ってすまなかったな』

謝ってるし…

「おいカズマ」

「く、くっそおお!!」

俺が声をかけると同時に、カズマは叫びながら急に走りだした。

「おいカズマ!？ ああもう… 先輩、追いかけていいんですか？ 笑いすぎですよ」

「あはははは!! む、無理! あははは! お、お腹痛い!」

お腹を押さえ、転げ回って笑う先輩。

カズマ、かわいそうに…

俺がカズマの走って行ってしまった方向を眺め、ぼんやりしていると、犬が足元まで歩いてきた。

「ん? なんだ?」

「わん!」

〈ピピッ〉

画面を見る

『人間って、大変だな』

「ああ、お前は気楽でいいな…」

……はあ、帰ろ。

俺はいつまでも笑い転げてる先輩を公園に残し、
帰路についた。

第7話 試作品（後書き）

なんだか自分の文体がわからなくなってきた…

キャラも不安定だし（、旦那）

第8話 たまにはゆったりと

「…あれ？」

どこだここ？

気が付くと俺は立っていた。　だだっ広くて何もない所に。　空と地面の区別さえつかない。　全て灰色の世界。

いやいやおかしいだろ…　俺は昨日普通に自分の部屋の自分のベツトで寝たはずだぞ？

「シュウ」

突然、後ろから声をかけられて振り向く。

「先輩？　いつからそこに？　ってゆーか、なんですかその格好…」

先輩は大きすぎるロングコートを羽織って立っていた。　しかし、前が留まっていない、コートが大きすぎるせいかギリギリ中は見えないが、風でも吹けば一瞬にして中がまる見えになるだろうな。

なぜだかわからないが、先輩は今中に何も着ていない。　という気が、いや、そんな確信があった。

「先輩？　無視ですか？」

先輩は俺の問い掛けにも無反応、そして黙ったまま、そっと自分の着ているコートの前のところに手をかけ…

「せ、先輩？ いったい何をしよう」と一

勢いよくコートを開いた。まるで自分の裸を見せつけてくる露出狂のように… もちろん中には何も着ていない。

「うわ！？ …え、ええ！？」

俺はすぐに目をそらしたが、手遅れだった。完璧に先輩の裸が見えてしまっていた。そして、異変に気付いて二度見する。

「ど、どーして…」

胸にあるはずの物が無い。代わりにあるのは無駄にガッチリした胸板だけ…

マ、マッチョだ… 先輩がマッチョになった…

そして俺の視線は胸板からみぞおちに、腹筋に、そして股間に…

「う、うわああああ！？」

化け物だ… あんなの… 人間じゃない…

俺は悲鳴を上げ、先輩（の顔をしたマッチョ）から逃げる。

「一ッ！？」

しかし走っても走っても先輩は追いかけてくる。

俺は学校に今日は休むと連絡を入れた。朝が早いにも関わらず、学校にはもう人がいることに多少驚いた。

さて、寝るか。

俺はもう一度ベットに横になり、もうあんな悪夢を見ないようにと願いながら眠りについた。

「一さい」

「ん…」

「一きなさい」

「んん…」

「起きなさい!!」

いきなりの怒鳴り声と共に、先輩の顔が目の前に現れた。

「うわ!?! またか!?!」

俺は跳び起きて先輩から離れる。

「やっと起きたわね …またかって何よ?」

くそ、また悪夢か！？　今度はなんだ！？　いったい何をしてくるんだ！？

「お姉ちゃん、シュウ君が怯えてるよ〜？」

先輩の後ろ、先輩の妹で俺の同級生であるモエが立っていた。

今度はモエも一緒か！？

「寝ぼけてるだけでしょ。　ほら、さっさと起きなさい！」

先輩にほっぺたをつねられる。

「い、いふぁいれふ」

…痛い？　ってことは夢じゃないのか？

「お、お姉ちゃん！　シュウ君熱出してるんだからだめだよ〜」

「ふん！　シュウはそんなヤワじゃないわよ！」

先輩はほっぺたから手を離し、俺の頭をぽんぽんと叩く。

「違うよ！　こゝみえて実はシュウ君は傷付きやすいんだよう？」

「いいえ、強いのに」

「弱いのに」

「強い！」

「弱い！」

だんだん目が覚めてきた…

「あの…」

「「なに!？」」

二人して俺を睨みつけてくる。

「二人とも人の部屋で何してるんですか？」

二人とも制服ってことは、学校帰りか。

「やっとちゃんと起きたわね。熱を出したって聞いたから、あんなの体温をもっと上げに来たのよ」

うわ、ただの嫌がらせじゃねえか…

「違うでしょお姉ちゃん。今日はシュウ君を看病しに来たんですよ？」

「うっ…」

先輩は小さくうめく。

「そーなんですか？」

「そ、そーよ！ あんたがいなくてからかい相手がなくてひまなの。 だから早く治しなさい！」

「えと、ありがとうございます。 明日には学校行くんで大丈夫です」

「ほ、他にやることはないだけよ！ いいから寝てなさい！」

「わかりました」

「なんか作ってくる！」

先輩は顔を真っ赤にしながら部屋を出て行った。

相変わらずにぎやかな人だな。

「あ、シュウ君これ」

モエが何かを思い出したようにカバンに手を入れ、プリントを取り出して渡してくれた。 学校からの配布物だろう。

「あれ？ どーしてモエが持ってるんだ？」

クラス違うのに。

「えと、カズマ君がシュウ君に渡しといってくれーって言っていました」
なるほど、カズマのやつ、めんどくさいからってモエに渡しやがったな。

「わざわざわるいな。 カズマには今度きつく言っとくから」

「あ、いいんだよ別に！？ おかげでシュウ君の家にこれたし…」

モエは顔を赤くして自分の前で両手をぶんぶん振りまわす。

「俺ん家に何か用でもあったのか？」

「いやっ、そーじゃなくて… あの… うう…」

もごもごと口ごもったモエは半泣きになり、そのまま部屋を出て行ってしまった。

「え？ ちょっと待っ」

〈ボタン〉

俺の声も虚しく、部屋のドアは閉まってしまった。

…俺、何かしたか？

「あんた、またモエのこと泣かしたの？」

手に鍋を持った先輩が呆れながら部屋に入ってきた。

「いや、俺は別に何もしてないんですが」

「まったく、あんたももうちょっと女心ってのを勉強した方がいいわね。 はい、おかゆ」

先輩は鍋からお茶碗におかゆを入れて俺に渡す。

「ありがとうございます。　なんだかんだいって先輩も優しいところあるんですね」

「うるさい。　黙って食べなさい」

先輩は少し照れたような、怒ったような顔をしてそっぽを向いた。
わがままで自由な先輩でも、少しは常識的なところはあったんだな。

…あ、そーいえば。

「あの、先輩」

「ん〜？」

先輩は部屋に置いてあった漫画を読みながら適当に返事を返す。

「どーやって家に入ったんですか？　親もないのに」

「合い鍵〜」

「そー…　ですか…」

前言撤回。　やっぱり先輩は非常識だ。

第8話 たまにはゆったりと（後書き）

あとがきって何かけばいいんだろう（ω、）

第9話 買い物 その1

「大事な話があるんやけど」

昼休み。

俺が自分の席で昼飯を食べていると、カズマが深刻な顔をして話しかけてきた。

「どーしたんだよ？ マジな顔して」

「あんな…」

カズマは言いにくそうにもじもじしながら、

「付き合ってくれへんか？」

と言った。

…はっ!?

「どーゆー意味だ？」

「そのまんまの意味や！」

カズマは真剣な瞳でまっすぐ俺を見つめてくる。そしてなぜかその視線が熱っぽい。

「カズマ… お前、俺のことをそんな目で見てたのか…?」

「…はい？」

「前々からそーじゃないかとは思ってたんだが… まさか、本当だったとわな…」

「え？ なにが？」

「悪いけどお前の気持ちには答えられないぞ、俺にはそっちの気はないんだ」

「なにがやねん！？ ふざけてやんとちゃんと話聞け！」

「なんだよ？」

「だから付き合ってくれって！」

「お前と？」

「オレに！ や！ もうすぐ妹の誕生日やから、プレゼント買いに行くんに付き合ってくれってことや！」

「ああ… なら始めからそー言えよ。 変な勘違いしちまったじゃねーか」

「わかるやろ普通！？ まあええわ。 んで、放課後空いてるんか？」

「まあ空いてるけど… 何か用でもあるのか？」

「だあかあらあ！ 妹の誕生日プレゼントを買いに行くって言うてんねん！」

ほとんど発狂しながら大声で叫ぶカズマ。

少しからかいすぎたか？

「わかってるって」

「はあ、 んじゃとりあえず放課後な」

大袈裟にため息をつき、カズマは教室から出て行った。

放課後。

「それで、あんたの妹は好きな物とかないの？」

前を歩く先輩が、俺の隣にいるカズマに質問する。

俺達は今、近所のショッピングモールに来ている。

そしてここに来る途中、学校帰りの先輩とモエに偶然ばったりと会ってしまい、なぜか二人も一緒に行くことになった。

「ん」 あんま知らないっす」

俺たちはとりあえずショッピングモールをぶらぶらしながらカズマの妹のプレゼントを探す。

「妹の好きな物くらいわかつきなさいよ。そうね… わからないんならモエに選んでもらえば？ 同じ妹どうし趣味合うんじゃない？」

と、なにやら理不尽な理屈をのべる先輩。

「そうすか？ んならお願いしよっかな。 ええか？」

そう言ってカズマは一番後ろを歩いていたモエの方に振り向く。

「ありゃ？」

変な声を出すカズマに若干引きつつ、俺もつられて後ろに振り向く。

「あれ？」

モエがいない。

「どこ行ったんや？」

「さっきからいなかったわよ？ はぐれたんじゃない？」

カズマの疑問に前を歩いていた先輩が答える。

「モエがいないの、気付いてたんですか？」

「当たり前じゃない？ 私はモエのお姉ちゃんよ？」

先輩は腕を組み、俺を小ばかにしたように答える。

当たり前なのか…？ 意味がわからない…

「いないってわかってたなら早く言ってくださいよ… 何かあったらどーするんですか？」

「いいじゃない、いつものことだし」

自分の妹がいなくなったというのに、まったく動じた様子もなく、先輩はどこまでも冷静だ。

モエがいなくなるのって、そんなによくある事なのか？

「とにかく搜しましょう。 まだ近くにいるかもしれせんし」

「どっかで絡まれてるかもしれんしな」

「今どきそんなヤツいないでしょ」

「そっすよね」

何がおもしろいのか、けらけらと笑うカズマと先輩。

どーして二人ともこんな冷静なんだ？ 心配じゃないのか？

…しかたないな。

「心配なんで捜してきます」

俺はほんわかムードの二人にそう言って、今来た道を行って行った。

「…いた」

あれから10分、ようやくモエを見つけることができた。

俺は道の真ん中でキョロキョロしているモエに近づき、話しかける。

「おいモエ、何してるんだ？ 先輩が心配して… なかったけど探しにきたぞ」

「あ、シュウ君！」

モエは俺の姿を見たときたんぱあつと笑顔になる。

「こんなところで何してるんだ？」

「えっと、みんなの後ろを歩いてたら、急に女の子に服をつかまれて… 気がついたらみんなもういなくて…」

気がついたらって…

「女の子って、知り合いかなんかか？」

「ううん。道を聞かれたの」

「…ちよつと、無理がありすぎやしないか？ うそをつくならもつとましなうそを一」

「違うよう！ ほんとだよ？ 背がこれくらいで、髪が空色をしてて、目が透き通ってるみたいなまるでお人形さんみたいな女の子！」

モエは手をぶんぶん振り回して、必死にその女の子を再現しようとしているが、全く伝わらない。

「で、その女の子はどーしたんだよ？」

「道を教えてあげたら何も言わずに、頭だけさげてどっかに行っちゃいました」

「うそくさ」

「ほんとなんですよう…」

モエは涙目になりながら訴えかけてくる。

なんでそんな必死なんだ？

「わ、わかったから泣くなよ。ほら、先輩のところに戻るぞ」

「は、はい」

空色の髪の女の子か。見たことないな。やっぱうそなのか？

そーいえば空色ってスカイブルーともいうよな。

って俺はいったい何を考えてるんだ：

第9話 買い物 その1（後書き）

みなさんお久しぶりです。

え？ 更新が遅い？ H A H A H A !

キノセイデスヨ（ω、）

第10話 買い物 その2

こんにちは。 モエです。

今は迷子になったモエを捜しにきてくれたシュウ君と、二人でシヨッピングモールを歩いているところです。

となりを見ればシュウ君の横顔。 ああ、カッコイイなあ…

「なんだ？」

視線に気付き、こっちを向くシュウ君。 うん。 正面から見てもカッコイイ…

「はあう」

「モエ？」

「ふえ！？ や、なんでもないよう！？」

「ぼーっとしてるとまた迷子になるぞ」

「う、うん。 ごめんなさい」

いくらカッコイイからって見すぎちゃだめだね。 失敗失敗。

「別に謝らなくてもいいけど。 あれ、先輩達どこ行ったんだろ？ 場所間違えたかな」

シュウ君は急に立ち止まり、首を傾げながらぶつぶつ言いだしました。

…あ、もしかして今シュウ君と二人つきり！？ 気付かなかった…

ど、どーしよ！？ ああ、なんだか緊張してきちゃった！

落ち着くのよモエ！ これはチャンスよ！ これをきっかけに一気に二人の距離を縮めるの！

「あ、あの！」

「ん？ なんだ？」

「せ、せっかくだし二人でぶらぶらしませんか！？ そしたらそのうちお姉ちゃんたちにも会えると思うし…」

「んゝ そうだな。 じゃあ行くか」

やった！ よゝし、あわよくばそのまま… エヘヘ…

「おゝい、 置いてくぞゝ？」

「ま、待ってくださゝい！」

こうしてモエとシュウ君の（らぶらぶ？）初デートが始まりました。

第10話 買い物 その2（後書き）

アヤカよ！ 今回から私が司会進行で、ちょっとしたコーナーでもやろうと思うの！

題して『とりあえず突撃してみる！』よ！

今日はシュウのところに行くわよ！ ていつ！

「わっ！？ 先輩！？ どこからわいたんですか！？」

「もうそのリアクションは飽きたわ。 それより何してんのよ？」

「見ての通り宿題をしています」

「くだらないわね」

「意味がわかりません」

「まあいいわよ。 今日はこのへんで帰るわ」

「は、はあ…？」

「じゃあね！」

「え、それだけですか！？」

「ていつ」

「……消えた。
うそだろ？」

第11話 買い物 その3

シュウです。

今俺はモエとショッピングモールをぶらぶら散歩しているんだけど…

「えと、モエ？」

「はい？」

「ちょっと… 近くないか？」

そう、モエがかなり近い。 ってゆうかももうすぐ横にいる、歩くとびに手が何度も当たってるし、正直かなり歩きづらい。

「そ、そーかなあ！？ 気のせいだよきつとお！ 気のせい… だよね？」

今にも泣きそうな顔で聞いてくるモエ。

いや、どー考えても気のせいとかそーゆうレベルじゃないだろ… なんかでもここは否定したらだめな気がする…

「や、やっぱ気のせいかな。」

もう何でもいいや。

「だよね！？ よかったあ。 バレてなくて」

…ばかかこいつ!？ そのセリフは口に出して言ったらだめだろ…

こいつはいったい何がしたいんだ？ 嫌がらせか？ だとしたら何のために？

「あの、大丈夫ですかあ？」

「…ん？ 何が？」

「シュウ君、今いやらしい顔してたよう？」

「してねえよ!？ 普通に考え事してただけだ」

いやらしい顔ってなんだよ…

「でも、シュウ君なら… いいかな…」

は？

「それどーゆー意味だー」

「おいこら!！」

俺の声は、急に後ろの方から聞こえてきた大声によってかき消された。

…ものすごく嫌な予感がする。 面倒なことになる前に早くどこか行かないとな。

俺は後ろ振り向かず、そのままそこを離れようとしたとき、

「おい！ 聞いてんのか！」

もう一度声が聞こえた。 とゆーよりも声をかけられた。

はあ… また面倒なことに巻き込まれた。

俺はため息をつきながら、声のする後ろに振り返る。

「お前、カズー」

「違あう！ そんなヤツは知らん！ オレはこんなところでいちやいちやしとるお前らに腹を立てたただのチンピラやー！」

そこにはだらしのない立ち方をしていて、サングラスに帽子、それにだぼだぼの服を着たカズマがいた。

もしかしてこれで変装のつもりか？ バレバレだろ… さすがにこんな誰だってわかー

「チ、チンピラ！？」

わからないヤツいたよ…

「そうやチンピラや！ 恐いやろ！」

恐くねーよ。 いまどきチンピラは無いだろ。

「こ、恐くなんかないですよ！」

そう言いながら俺を盾にして後ろに隠れるモエ。

…恐いのか？

「そうかそうか、オレが恐いか！　ならもっと恐がらしたろ！！」

そう言ってモエと俺に近づいてくるカズマ。

「うう」

っと、さすがにこれ以上はまずいな。

「おい、悪ふざけはやめろ、モエが怯えてるだろ」

「なんや？　文句でもあるんか？」

「なんのつもりだよカズ」

「まてえ！！　オレの名前は『かっちゃん』や！　カズマなんてやつ知らんぞ！」

かっちゃん！？　カズマだからかっちゃん？　なんて知能が低いんだこいつは…

「じゃあ…　かっちゃん」

「なんや？」

「お前は何かしたいんだ？」

「さーなあ？ 聞きたいことがあるんやったら力ずくで聞いてみ
！」

そう言っつて顔同士が当たるスレスレまで近づいてくるカズマ。

いったいなんなんだ…

「ちょ、近い」

「グハァッ！！」

なんだ！？ カズマが急にふっとんだぞ！？

「おい、大丈夫」

「く、なかなかいいパンチしとるやないか」

カズマは上半身だけを起こし、口元をぬぐいながら訳のわからないことを言いだした。

パンチ？ 俺はただ体を軽く押したただけだ。

「待て、俺はなにも」

「人を傷つけるのを一番に嫌うお前が、女を守るためにオレを殴った。女を守るためやったら自分のプライドも捨てれるとはな、かっこええやないか！ お前は男の中の男や！！ お前に免じて今日のところは引かしてもらおうわ」

そう言って立ち去ろうとするカズマ。　小さい声で『よっしゃ言い切った!』とか言ってるし。

「待て、なんなんだその設定は…　って聞いてんのか?」

こちらに背を向けたままのカズマに話しかける。

「お前の熱いハートはちゃんと受け取ったで!!　じゃあな!」

無視か!?

「おーい!　勝手に変なもん受け取ってんじゃねえ!!　待てって!!」

しかし俺の叫びも虚しく、言い終わるころにはカズマの姿は見えなくなっていた。

「……………」

何がしたかったんだ?　ただの嫌がらせとしか…

「あの、大丈夫、夫?」

モエが後ろからひよこつとでてくる。

「まあ別になんともないが」

「えと…　ごめんね」

モエは目に涙をため、上目使いに俺を見てくる。

「本当にごめんね！　モエを守るためにプライドを犠牲にしたんだよね！？」

なッ！？

「待て、別にあれは一」

「うう…　ごめんなさいっ」

モエはそう言ってどこかに走り出した。

ああ…　モエが変な勘違いをしたままどこかに行ってしまった…

…追いかけないとな。　ほんと、めんどくせえ。

ん？　先輩からメールだ。

『次回は私が主役よ！！』

…なにが？

第11話 買い物 その3（後書き）

アヤカよ！　じゃあさっそく前回の続きいくわよ！

今回はエセ関西人、じゃなくてカズマのところに突撃よ！　ていつ！

「おわ！？　アヤカさん！？　どしたんすか急に！？」

「ここがあんたの部屋？」

「いや、教室っす」

「こんな時間に教室で何してんのよ」

「いや、普通に授業っすけど。　ちなみに今は4限目っす」

「…帰る」

「ええ！？　何しにき」

「えいつ」

「消えた！？　どこ行ったんや！？　…さすがアヤカさん」

第12話 買い物 その4（前書き）

作者「なんかちがう!!」

アヤカ「は？ どーしたのよ急に」

作「アヤカのキャラだよ。基本はツンデレにしたいんだけど、うまくいかない！」

ア「あんたの表現力が乏しすぎるのよ」

作「とにかく足りないんだよ!!」

ア「脳の量が？」

作「違う！ こともないけどそれじゃない。デレだよデレ。アヤカにはデレが足りないんだよ。よし、ならさっそくデレを強調して…」

ア「ちょっと待ちなさい！ なんなのさっきからデレデレデレデレって！」

第12話 買い物 その4

デレってなによ!?

あのへボ作者、無理矢理本編始めたわね!

《へボ作者ってゆーなよ。 これでもこの世界の神だよ?》

げ!?! あんた本編にもでてくんの!?!

《そっちのが書きやすいからね。 今日はアヤカと作者でおおくりしまゝす》

ちょっと勝手に進めないでよ! それにカズマはどうすんのよ?

《迷子になって帰って来れないって設定にした》

なんでもアリね:

《そんなことよりシュウとモエのこと追いかけていいの? どっか行っちゃったよ?》

わかってるわよ!

《ぶつぶつ言いながらも、シュウ達を追いかけてアヤカも走りだした。》

作者視点なの?

《一応天の声ってことなんで》

やりたい放題じゃない。

《だって作者だし》

まったく恐ろしいわね。

《作者の声は絶対だからね、作者が言えば物語のキャラクターは絶対そーしないとイケないんだよ》

……それ、ほんとなの？

《ほんと。その気になればこの小説に18禁指定とかかけられるよ》

なら…

《ん？》

それなら私と…

《なんだよ？》

私と一緒にこの世界を壊しましょ！

《却下！！　なんつー恐ろしいこと言うんだお前は》

ケチ。　そんなだから6万円も落とすのよ！（実話）

《なぜそれを!?!》

全部おみとおしよ!

《く、神を侮辱したな? 後悔させてやる》

何するつもりよ?

《ふふふ… まあすぐにわかるよ。 公園に行ってみ? そこにシ
ユウとモエもいるから》

変なことしたら承知しないわよ!

一公園一

二人はどこ?

《もうすぐくるよ。 ってほら、モエが走ってきた。 ほらほら、そ
この草むらに隠れて、見つかるよ》

わかってるわよ。 シュウは?

《モエの後ろから走ってくるよ》

「モエ! 待て!」

《シユウはモエに追い付き、モエの肩をつかんで強引に自分の方を向かせる》

「うう… だって、だってモエのせいでシユウ君のプライドが一」

「だから勘違いだって、別に俺はそんな訳のわからないプライドなんてもってないから」

「ほんとに…?」

《あーあー モエのやつ、あんなに目をうるませちゃって》

なによあの空気…

《ピンクだね》

ええ…

「ああ、さっきのあいつが勘違いしただけだ」

「よかったー きゃっ」

「おわ、大丈夫か!？」

《急にふらついて倒れそうになったモエを、シユウが支える》

「へへ、安心したら力がぬけちゃった」

「お、おう…」

《シュウがモエとの急接近で目のやり場に困ってるな》

ふん！ デレデレしてんじゃないわよ！

《おやおや？ ヤキモチですかい？》

そ、そんなんじゃないわよ！

《ならこのまま二人がいい感じにピンク色な展開になってもいいのか？》

べ、別にいいわよ？

《ならいいけどね》

「あ、えと…」

「う…」

《無言で見つめ合う二人》

ううー

《あ、モエが目を閉じた。 覚悟決めたのかな？ そしてそれを見たシュウも何やら決心したみたいだね。 はい、あの二人あと5秒でキスしまゝす》

へ、へえー

《なんか無理してない？ 顔引きつつてるけど》

んなことないわよ！

《あっそ。 ちなみにあと3秒ね》

く…

《2》

あ…

《いゝち》

「やっぱだめー！！！」

《あーあ、我慢できずに飛び出して行っちゃった。 冗談なのに》

「ひゃっ！ お、お姉ちゃん！？」

「先輩!？　どーしてここに!？」

突然の私の登場に、二人して固まるシュウとモエ。

「あ…　いや、その…」

勢いで飛び出してきたはいいものの、なんて言えばいいのかしら…

「と、とにかくあんたたち離れなさい！　公園の真ん中でなにしてるのよ!」

「へ？」

「ん？」

シュウとモエは顔を見合わせて、

「ひゃっ!？」

「おわ!？」

ババツつと、目にもとまらないスピードで離れるシュウとモエ。

「なっ、ななな！　シ、シュウ君!？」

顔を真っ赤にしてパニクるモエ。　ふん、自分でやっといっている
さらなによ!

「俺達いったいなにを…」

「はあ？ 自分の意思でやったんでしょ！ 言い訳は見苦しいわよ！」

「いや、なんか誰かに操られてたような感じがしたんですが」

…ああ、なるほど。

「あんのへボ作者」

「何か言いましたか？」

「なんでもないわよ！」

「そんな怒鳴らなくても聞こえますよ。ところでさっき、カズマが全く訳のわからないノリで絡んできたんですけど、またしょーもないことでもひらめいたんですか？」

「え？ あ、ああうん。ちょっといたずらしただけよ」

絶対作者ね！ 余計のこととして…

「本当かんべんしてくださいよ。さすがにあれはやりすー」

「うるさいうるさいうるさーい！！ もう帰るわ！ 何も知らないくせに！ あわれねこの鈍感主人公！！」

「何がすか？」

「じゃあね！」

「あ、ちよつと先輩!？」

なによシュウのやつ! こっちの気もしらないで!!

第12話 買い物 その4（後書き）

ア「無理矢理終わらせたわね…」

作「途中まであったからそれを思いきりねじまげてみました」

ア「ほんと無茶苦茶ね… で、次の更新はいつなのよ？」

作「……とうっ!!」

ア「あっ、こら!! 逃げるんじゃないわよ!!」

第13話 その後（前書き）

お久しぶりで〜す

第13話 その後

「はあ…」

授業中。

俺は窓ぎわの席でほおづえをつきながら、空をぼーっとながめる。
わからない… なにがわからないって、もちろんこのあいだの先輩が急に怒りだして帰っていった件だ。

あれから一週間、先輩は屋上にも現れないし、廊下ですれ違っても無視。いつもの先輩なら絶対になにかしらの接触してくるはずなのに。

別にこれはこれで静かだからいいんだが、やはり何か居心地が悪い。

「ユウ」

「はあ…」

もう一度ため息をつく。 まあこんなことをしたって答えがわかるわけでもないんだけどな。

「シュウ！」

「ん？」

突然名前を呼ばれて振り返る。　少し離れた席にいるカズマだ。

カズマは先生にばれないように小声で話しかけてくる。

「まだ悩んでるんか？　アヤカさんのこと」

「ん、まあな」

「本人に聞いたらええやん」

「いや、別にそこまではいい」

「いつまでもいらん意地はってたらあかんで」

「そんなんじゃない」

「ほんまに女心ってのはよくわからん」

「カズマァー!!」

「うわっと、なんすか？」

「授業中に、何をひそひそと話してるんだ？」

先生に見つかるカズマ。　可愛いそうに。　別に思っていないけど。

「いやあ　　こう、教科書の角って何度かなあて思ってる」

「んなもん90度に決まっとるだろうがっ!!」

何がおもしろいのか、クラスの奴らはけらけらとそれを笑い、教室は騒がしくなる。

それを注意しようと先生が口を開いたところでチャイムが鳴り、授業は終わった。

そして昼休み。

俺はいつも通り屋上でパンを片手にぼんやりと我が街の風景を眺めていた。

一週間前まではこの時間はとても貴重だったが、今はこのひまな時間をもてあましている。

「はあ、なんなんだよいたい…」

『俺、何かしましたか？』

そう聞けたら一番早いんだろうが、こっちは全く心あたりがないし、何か嫌だ。

あの、次の日なら聞けたのに。今さら言い出しづらい。

いらぬ意地なんて張ってないでさっさと聞けばよかったな…

またため息をつく。

「あ、おったおった。 まあだうじうじしとんのか！」

「カズマか。 なんだ？」

振り替えずに返事だけかえす。

「いい加減に元気だせ！」

「ん」

「いつまでもそんなしけた顔見せられとったら気分悪いわ！」

「ん」

「ってことでシュウの悩みを解決しに参上したぞ」

「ん」

「はい、じゃあ特別ゲストのアヤカさんの登場や！」

「ん… んん!？」

慌ててカズマの方に振り返る。

「うそや」

「……………」

なんなんだいたい…

「まあ代わりといっちゃなんやけど、モエをよんできたで」

カズマの後ろからモエが出てくる。

「む」

似たようなシーンが前にもあったような…

「それでやな！ オレとモエとで、どーやったらシュウが元気になるか考えたんや」

「…それで？」

よこでこくこくと頷くモエを見ながら、返事を返す。

「んで出た答えがこれや」

カズマはそう言って、小さく折られた紙きれを渡してくる。

紙をひろげると、中には小さくて綺麗な文字がいっぱい並んでいた。

そして紙の上、オレンジと黄色の蛍光ペンでなぞられた、少し大きな文字。

『ドキドキ☆シュウと先輩の仲直り大作戦』

「んじゃ、作戦結構や！！」

「…は？」

こーして俺はまた、めんどくさいことに巻き込まれた。

第13話 その後（後書き）

アヤカ「私の出番は!?!」

作者「…来年、かな」

ア「はあ!?! だめよ!?! 今すぐもう一話かきなさい!?!」

作「…とうっ!?!」

ア「あっ!?! また逃げたわね!?!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0118e/>

俺と先輩(アホ)とその他

2010年10月23日02時13分発行